

ヒッチハイクによるコミュニケーション機会の創出支援システム

Communication Chance Creation by Supporting Hitchhiking

鈴木 雄也^{*1}, 林 佑樹^{*2}, 瀬田 和久^{*2}

Yuya SUZUKI^{*1}, Yuki HAYASHI^{*2}, Kazuhisa SETA^{*2}

^{*1}大阪府立大学 現代システム科学域

^{*1}College of Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

^{*2}大阪府立大学大学院 人間社会システム科学研究科

^{*2}Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

Email: suzuki@ksm.kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：私たちはコミュニケーションをとりたいという欲求を本来的に抱えている。一方、ヒトとの関わりに苦手意識を有する人々がその機会を主体的に持つことは難しい。本研究では、その機会としてヒッチハイクに着目した。ドライバーが他人に興味があるため会話が活発になりやすく、多様な価値観との触れ合いが期待できると考える。そこで、ヒッチハイクを手段としてコミュニケーション機会を創出し、それへの意識変容を促すシステムを提案する。

キーワード：ヒッチハイク， コミュニケーション， 会話機会の創出

1. はじめに

あなたは隣さんに洗剤を借りようとするだろうか。つい一世代前の昭和の時代までは地域社会とのつながりが特にコストをかけずとも自然に維持されていたにもかかわらず、現代の技術革新がもたらす利便性の進展は、地域社会との繋がりをあたかも必要不可欠なものではないとするかのごとく認識を普及させて、さらに悪いことに、それを前提とするかのような社会基盤の変調をもたらしてしまっているように見て取れる⁽¹⁾。

かつて人間は危機回避のために群居本能でコミュニケーションを必要としていた。群居性を示す動物は、群れのメンバー間で洗練されたコミュニケーション手段を発達させ、協力的な行動や群れの統制を図ることで、個々の生存確率を高めている⁽²⁾。また、「私たち人間は、コミュニケーションしたいという強い欲求を本能的に有している。一人きりになるのは寂しいし、怖い」とあり⁽³⁾、心のどこかでコミュニケーションを欲していることが伺える。

このように根底にはコミュニケーションへの本能的欲求がある一方で、社会での人との関わりが希薄となることに起因して、そうした関わり、あるいは関わることそのものを苦手とする人も一定数確認でき、彼らがコミュニケーションに主体的に取り組むことを容易としない社会変革が進んでいる。

そこで本研究では、技術革新がもたらしたコミュニケーションへのハードルを、それにより低減する会話場を提供することを考える。このような契機として、「ヒッチハイク」を通じた未知の人との交流に着目する。本研究では、ヒッチハイクの困難性を低減することでコミュニケーション機会の創出を促し、そこで人生を豊かにするようなコミュニケーション支援を目掛けたシステムを提案する。

2. アプローチ

2.1 サービス提供を機会としたコミュニケーション

自らが発した話題が相手に受け入れられず、コミュニケーションが失敗してしまうことへの恐れは、主体的にヒトと関わろうとする心理的抵抗へと繋がる。これが未知の他者との会話ともなれば、更にこのハードルが高まると考えられる。一方で、タクシー等のサービスを機会とした会話では、サービス提供者からの話題提供により、このような心理的抵抗が軽減されたコミュニケーションをとることができる。しかし、サービス受容者に配慮された接待的な会話がなされることが多く、結果として形式的な応対が続いてしまい、どこか不自然な会話となったり、会話が续かなくなってしまうことも少なくない。

2.2 ヒッチハイクを機会としたコミュニケーション

本研究では、サービス提供機会での会話とは異なる性質を備える「ヒッチハイク」に着目する。ハイカーを拾い上げるドライバーは、警戒心よりも好奇心が強く、未知の他者とのコミュニケーションを好む傾向があると考えられる。したがって、ドライバーからの積極的で自然な話題提供により、多様な価値観や考え方に触れ、好奇心を掻き立てられる会話場の成立が期待できる。そこで本研究では、ヒッチハイクを通じた会話機会を創出することを考える。

一方で、ヒッチハイクの実践に至るには、大きな心理的ハードルが存在する。特に経験の少ない初心者ハイカーにおいては、未知なる他者(ドライバー)がいつ来るかも不透明であり、大衆に好奇の目で見られ羞恥心が生じることも少なくないと考えられる(困難性①)。また、ドライバーからの主体的なコミュニケーション創発が期待されるとはいえ、必ずしも話題の興味が合致した会話が成立するとは限らない(困難性②)。

そこで本研究では、ヒッチハイク行為に伴うドラ

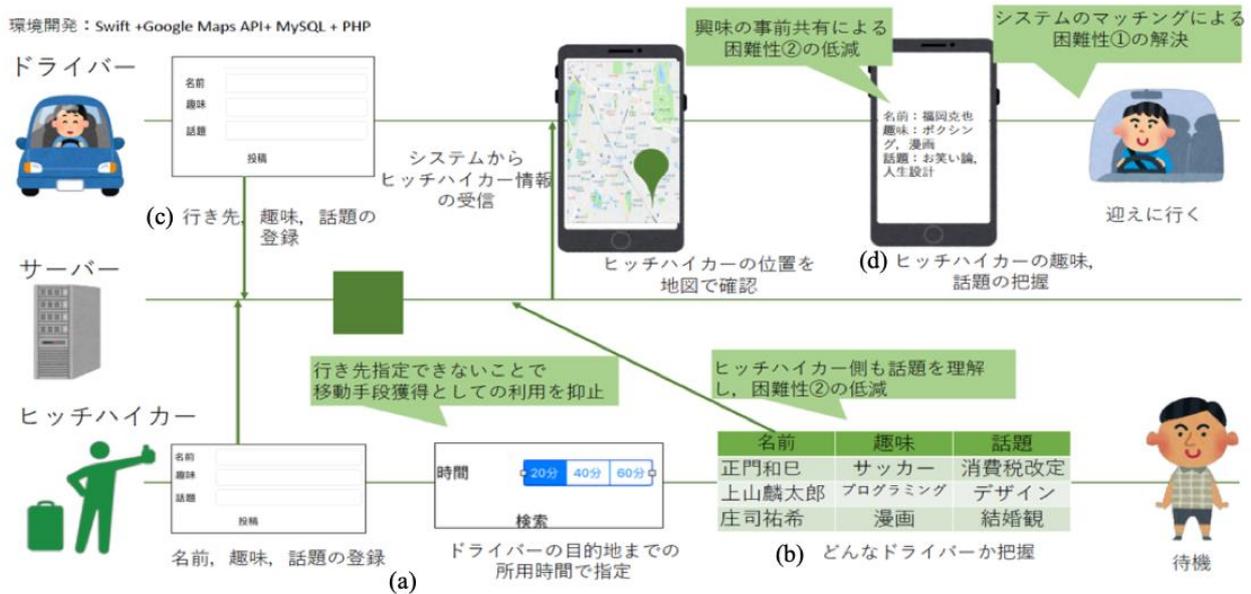


図 1：コミュニケーション創出支援システムの全体像

ハイカー待機時の不安を低減するために、ハイカーとドライバーのマッチングを支援するシステムを通して、ヒッチハイクへの動機づけを与える（困難性①の軽減）。また、このマッチングを予め共有された話題や趣味情報に基づくことで、興味が合致する話題が創発される確度を高めることを狙う（困難性②の軽減）。

3. コミュニケーション創出支援システム

2章のアプローチを具体化し、ヒッチハイクによるコミュニケーション創出を目的とした利用を前提とするシステムを開発する。システムは iOS アプリケーションとして動作し、携帯端末を通して気軽に利用することができる。

システム利用の全体像を図 1 に示す。本システムでは、ユーザをドライバーとハイカーの 2 タイプに分け、それぞれ異なるインタフェースを提供している。以下、システムが各ユーザに提供するために実装を進めている支援機能を述べる。

3.1 ハイカー支援機能

ヒッチハイク前に、名前と趣味、期待する話題情報とともに、目的地までの所要時間（コミュニケーションをとりたい時間）を入力する（図 1(a)）。

システムでは、端末の GPS 情報からハイカーの現在地を取得し、その地点から入力された所要時間で移動可能な限界到達地点を計算する。その範囲が目的地までの道のりに含まれるドライバーを、趣味と話題情報と共に表示する（図 1(b)）。これらのドライバー情報は、ハイカーが予め話題展開を想定したり、内容を調べたりすることに寄与すると考えている。ここでは、タクシーなど移動そのものが主目的となる便利ツールとしての利用を抑制するため、移動時間 30 分以内というような行き先情報はあえて入力

できないようにしている。

3.2 ドライバー支援機能

ドライバーは、運転開始前に、行き先、趣味、話題を入力する（図 1(c)）。本システムが提供する地図上にピンとして表示されるハイカーの位置を確認し、必要に応じてタップすることで、そのハイカー側の名前、趣味、話題を把握できるようにすることを考えている（図 1(d)）。これにより、ヒッチハイクにおけるマッチングの円滑化を狙いとされている。

これらの機能により、ハイカーの話題への準備性を高めながら、ドライバーとのマッチングを補助し、不安を軽減したコミュニケーション創出できることを狙いとされている。

4. まとめと今後の課題

不安感を低減したヒッチハイクの実現によるコミュニケーション創出支援システムを提案した。本システムの副次的な効果として、ヒッチハイクそのものへの社会的な理解が進み、新たなコミュニケーションの場としてのヒッチハイク文化が根付くことにも寄与すると考えている。

今後の課題として、本システムの実装を進めると共に、長期的な試行実験により使用者のコミュニケーションへの意識変容の有無を調査していきたい。

参考文献

- (1) 辻大介：若者におけるコミュニケーション様式変化，東京社会科学情報研究所紀要，Vol.51, pp.42-61 (1996)
- (2) 菊水健史：群れの機能と「安心」の神経内分泌学，Vol.68, No.1 pp.67-75 (2018)
- (3) 齋藤孝：コミュニケーション力，岩波新書 (2004)